

2026年 2月7日(土)

14:00開演 (13:30開場)

京都芸術劇場 春秋座 [京都芸術大学内]

能 屋島

能
後シテ 源義経
前シテ 漁翁
ツレ 漁夫 観世淳夫

ワキ 旅僧 宝生常三
ワキツレ 従僧 舘田善博
ワキツレ 従僧 小林努
アイ 屋島ノ浦人 野村萬斎

大鼓 亀井 広忠
小鼓 大倉 源次郎
笛 竹市 学

狂言 孫智

シテ 祖父 野村万作

アド 舅 深田 博治
小アド 太郎冠者 月崎 晴夫
小アド 智 野村 裕基

プレトーク〈演出をめぐって〉
片山九郎右衛門 / 天野文雄

屋島

やし
ま

春秋座 能 能 狂言

渡邊守章 記念

「春秋座一能と狂言」シリーズは、
2009年度に渡邊守章
(当時舞台芸術研究センター所長)の
企画・監修により始まりました。
昨年度に引き続き、
「演出」に焦点をあて、能・狂言の
新たな楽しみ方、見所に迫ります。



文化庁

京都芸術劇場

孫智

まごむこ

野村 万作



野村 萬斎



深田 博治



月崎 晴夫



野村 裕基



観世 鎮之丞



観世 淳夫



片山 九郎右衛門



宝生 常三



竹市 学



大倉 源次郎



亀井 広忠



□ 入場料(全席指定)

〈一階席〉
一般 7,500円／友の会 7,000円

〈二階席〉
一般 6,500円／友の会 6,000円
学生&ユース 2,500円

* ユースは25歳以下
* 学生・ユースは要証明書提示
* 未就学児のご入場はご遠慮ください。

6歳以上18歳以下の皆様は無料でご招待(同伴者は半額)
お申込み方法など詳細は劇場WEBサイト
(<https://k-pac.org/kodomobutai2025/>)
をご確認ください。



□ チケット発売日

友の会先行発売——2025年11月11日(火)

10月27日(月)までの入会でご利用いただけます。

一般発売——2025年11月12日(水)

※チケット発売日はチケットセンター窓口での販売をいたしません。
お電話かオンラインチケットストアでのお申込みをお願いいたします。

□ チケット取扱い

● 京都芸術劇場チケットセンター(窓口販売・電話予約)

Tel. 075-791-8240 (平日10:00~17:00)

● 劇場オンラインチケットストア <https://k-pac.org/>
*要会員登録(無料)

● チケットぴあ <https://t.pia.jp>

● イープラス <https://eplus.jp>



※車椅子ご利用のお客様、足の不自由なお客様は、
京都芸術劇場チケットセンター(Tel. 075-791-8240)まで
お申込み・お問合せください。

※当劇場2階席への移動は階段のみとなります。

□ 託児サービス(要事前予約)

※詳細は劇場WEBサイトをご確認ください。



京都芸術劇場 春秋座

〒606-8271 京都市左京区北白川瓜生山2-116 京都芸術大学内

京都芸術劇場

検索

● 叡山電車「茶山・京都芸術大学」駅下車 徒歩約10分

● 京都市バス204・5・3系統「上終町・瓜生山学園 京都芸術大学前」下車

※駐車場はございませんので、お車・バイクでのご来場はご遠慮ください。

□ 主催・お問合せ先

京都芸術大学 舞台芸術研究センター

Tel. 075-791-9207 <https://k-pac.org/>

2026年 2月7日(土) 14:00開演(13:30開場)

春秋座

能と

老人の「自負心」と義経の「妄執」

——『孫賀』と『屋島』——

● 舞台監督 小坂部 恵次、大田 和司(京都芸術大学 舞台芸術研究センター)
● 照明デザイン 藤原 康弘 ● 協力 一鉄仙会、万作の会
● 後援 一 京都市教育委員会

『孫賀』は和泉流だけにある作品です。それだけに京都では初めてという人も多いと思いますが、いずれかといえばシテの祖父を演じる万作氏好みの作品でしょうか。この日は賀が舅に初めて会うめでたい日ですが、祖父はその中心ではありません。しかし祖父はアドの舅をさしおいて、同じことを繰り返してゆきます。賀は孫の裕基君ですから、ことさら祖父役の万作氏の芸の見せ所です。『屋島』は有名な義経の「妄執」を描いた世阿弥の能です。その「妄執」のために義経の霊は現世に戻ってくるのですが、その「妄執」とは詞章にあるように、弱い弓を流してしまつたことにほかなりません。それを中心に据えて「主題」にしたのが『屋島』です。替えアイとして有名な那須の語りはずつと後代の工夫で、本日は萬斎氏による「居語り」です。また、前半では『平家物語』で知られる景清と三保の谷の「鍛引き」が老漁夫(義経の化身)によって語られますが、この二人は能には登場しません。この物語がおかれた理由は、義経の「失敗」を際立たせるためなのです。また、キリで壇の浦の戦いにかさねて修羅道に堕ちた義経と教経の争いが描かれるのも、現世での失敗が修羅道において取り戻せたことを示しています。こうしてみると、鎮之丞氏演じるこの能には従来の世阿弥の修羅能とは少し変わった「趣向」もあるようです。(天野文雄)